
夢幻導師

白色の色鉛筆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻導師

【コード】

N0929Q

【作者名】

白色の色鉛筆

【あらすじ】

世界は一見して、平和だった。

凶悪犯罪がニュースになって飛び交い、動物園では赤ちゃんが生まれたと報じられ、経済摩擦がどーだ、与党と野党がもみ合って誰かが倒れたとか、そんな平和だ。

そんな社会からはみ出し、二年間も水面下で沈んでいる男、南本友哉は世界の表舞台に立つことはない夢幻導師として暗部に沈殿していた。

夢幻導師。

世界中では一部の人間にしか知られていない、魔術を使える人間を
そう呼び、世界に大きく関わることなくひっそりと生きる人間たち
をそう呼んでいた。

南本友哉二十二歳、無職。自称、親殺し以外は何でもやるフリーの
何でも屋。

電気ガス水道、家賃の滞納が三カ月を超えて人間として廃棄処分寸
前の彼の前に一人の来訪者がやって来た。

夢幻導師である友哉に用があるのだと来訪者はそう言った。

来訪者（前書き）

おそらく十五歳未満禁止のほうがいいんじゃないかね？ってことでそうなりました。

人が死ぬとかもう、自分のにはいやなんですけどね。

原案さん二人、執筆が自分で行きますので、十日とかそれくらいの間隔をあけてまったりと進んでいく予定です。場合によっては三日とか、二日とか、二時間おきとかの更新になったりするかもしれない。

ノリと勢いです。

内容的にはシリアスなのかなー？とか思ってみたり。今回、魔法っていう設定は公には認められていないという世界観の元に話が進んでいきます。

主人公がなんでスイーパーって呼ばれるのかはわかりません！まだ自分も先が見えてません！なのでがんばりますよ。ええ、もちろん。それではまた今度

来訪者

大都会の街の中、まるで自分には関係ない様に世界は回り続けていた。

世界には二つの場所がある。

光の当たる場所とそれ以外の場所の二つだ。

それ以外の場所から光の当たる場所を見ると、とてもではないが眩しくて仕方がない。

そう、そういう場所に憧れて行けば行くほど、自分は深淵に墮ちた。

「このまま死ねたら楽だろうになあ」

電気ガス水道の全てが止められ、しかも追い打ちをかける様に大家はいい加減出て行けと催促して来る。ここ三日は何も食べていないはずなのに、どう言う訳か腹の虫は死んでくれないらしく、ぐうと音を鳴らしてソファの上で寝返りを打つ。

ベッドはあるのだがカビが生えていて使えない。そんな最悪な状況だった。

真つ暗な部屋で天井を見上げるとネオン街の灯りが天井を照らしてフラッシュしていた。

ふっと上半身を起こして入口のドアを見る。

「な、何ですかこれは！インターフォン壊れていますよ！」

女の声が聞こえてドアの向こうを透視する勢いで睨みつける。

この時間に誰だ？って時計壊れてるんだっけな。

壊れた電池が切れた腕時計を外すと力任せにドアがガンガン！と殴られて腹が減り過ぎて力が入らない身体を起こそうとして…失敗した。

「南本さーん！南本友哉さーん！いらっしやいますか！いたら返事をしてください！」

キンキンと響く様な高飛車な声が響いて、当の本人は至極面倒そ

うな表情を浮かべた。知り合いに若い女などいない上にこんな時間（分からないが）に来るようなお行儀の悪い女も知り合いにはいなかった。

めんどくさ…。

そう思つてソファにごろんと横になる。

もう…死んでいいだろ？俺みたいな社会的弱者はひっそりと死のう。

そう思いながら目を閉じると、先ほどよりも強い力でダンダンダン！とドアが叩かれる。

「セバスチャン！破壊してしまいなさい！」

なんだかドアの向こうで物騒な事を言い出されて友哉が片目を開いてドアの方を眺める。さすがに壊したりはしないだろう、住人は良識が無くてもお客は良識があるはずだ。

セバスチャンつてなんだよ。つて待て！破壊つて勘弁してくれ！

友哉が飛び起きてドアに手をかけると、蝶番と鍵の部分が破壊されて友哉はドアの下敷きになった。

「ありがとう、セバスチャン」

「いえ、お嬢様のためならば何なりと」

何が何なりと、だよ。

ドアの下で友哉は立ち上がる気力も無く来訪者の様子を伺う。とてもではないが、こういう手荒な入室をして来る輩はまともな人間ではない。

「…ひどい部屋ですね」

「左様で」

「むぐっ」

ドアの上に立たれたのか、布団の様に自分の上に二人分の加重を感じて声を上げると、上の二人が首を傾げた。

「や、やあ。お、ピンクか」

「っ！」

ドレスの足元から声が聞こえて少女はその場で足を踏み鳴らすと

友哉はドアの下で悶絶した。

「ドアはこちらで直しますが、そちらの治療費は払いませんよ？」
見れば見るほど、良いところ育ちのお嬢様、と言った感じだった。
赤を基調としたドレスを身に纏い、靴も真っ赤なシューズで見えて
いる足元にも気を使っている様だ。

その後ろに控えている初老の男性はバトラースーツに身を包み、
神妙な顔をして背後に控えていて、いるのかいないのか分からない
様な存在感は逆に彼が一流であることを証明していた。

美しい十五くらいの少女は両手を前に揃えてこちらを勝気な瞳で
見下ろした。

「南本友哉現二十二歳、六月二十日生まれ。私立小学校に入学後、
成績優秀で卒業。そのまま市立中学、私立高校をトップの成績で
卒業後、帝国大学に入学するも二年生で中退。その後世間との関り
を断ち今に至る。これでよろしいですかね？」

よろしいですか？と聞かれてもその通りなので何も答えずにいる
と、少女はため息を吐いた。

少女から見てもどうにも解せない。

優秀な男だとは聞いているが、今にも倒れそうなほど痩せ衰えて
いて、ホームレスよりも酷い環境で生活し、長く伸ばしっ放しの髪
の毛、どこのブランドなのかも分からないデニムにシャツ、履き古
している今にも穴が開きそうなシューズを履いているこの男がセバ
スチャンの情報によって導き出された男なのか分からなかった。

「えっと…まあ俺の名前と経歴は正解だけどね。君の名前、教えて
くれない？」

「南本雫です」

彼女が頭を下げると、友哉は一瞬だけ驚いた様な顔をした。

「同じ南本でも金持ちの南本さんね」

くすくすと笑うと友哉はおかしくてたまらなかった。

南本コンツェルンの御令嬢、雫嬢は新聞に顔を載せない日はない。彼女の一言で世界は動き、彼女が指を指せば世界は混乱する。そういう影響力がある少女だった。大財閥の若き司令塔、それが彼女の地位。十五歳にしては食べる物が違うのか、既に大人の女性のように身体は成長しているし、顔つきは幼いがまたそのギャップがたまらない。

対して同じ南本でも今にも貧困に喘ぎ、住む場所すら追い出されそうな自分とは全く違う。

光の射す場所にいる少女と闇の中に生きる自分。

世界には二種類しかない。そう…二種類なのだ。

そんなことを考えていると余計に腹が減った。

「とりあえず座る？お茶とか出せないけど」

暗い部屋の様子を見て期待もしてないだろうけど…ね。

友哉はとりあえず客らしい雫に尋ねると、雫は首を左右に振った。

「病気になりそうなので遠慮して置きますわ…」

あーそう。性病以外はなんでもありそうだしねえ。

友哉は雫の言葉を聞き流しておく事にした。どうにも言い難い事もはつきりと言う性格らしい。高飛車…なのかもしれないがそうでもなければ世界を牛耳る事は出来ないはずだ。

「で…何の用？相談料から貰っていい？」

「相談料ですか？」

「そ、相談料。そちらさんが情報網とやらを使って俺の事を調べたなら、知ってるんじゃないか？」

友哉が後ろに控えているセバスチャンの方を見ると、セバスチャンがすつと前に出て懐から札束をドンと机の上に置いた。

か、金だ！しかもちやらちやらしてない！うっほーい！

友哉はテーブルの上の置かれた札束を拾い上げて頬ずりする。

「あー、もう何年ぶりの札！こんなにいっぱい！うひょー、とりあえず腹がいっぱいになる！」

涙を流す勢いで友哉が喜んでいる様子を雫が見下ろして怪訝な顔を

する。

「で、雫さんは何の依頼？」

「何でも屋、南本友哉さん。親殺し以外ならなんでも引き受ける凄腕のスイーパー。本当にあなたがそうなのですか？」

「なに、そっちの方を依頼したいわけ？別に構わないけど、何処の誰をどういう風にして欲しいのかな？」

雫はそう尋ねられてぞくりとした。先ほどまでだらけていた男の見える雰囲気が一瞬にして消えた。

「でもさ…雫さん。因果応報って奴がある。雫さんが誰かをどうしようとして強引に力押しで解決したら、あんたきつと、良い死に方しないよ？」

シン…と部屋の中に静かな空気が流れた。

覗きこむ様にして友哉が雫の顔を覗き込むようにして伺う。

少しばかり少女に脅しをかけておこうと思っただのは友哉の善意から来るところだが、少女はどう受け取ったのか。その方向によっては依頼を拒否することにもなりかねない。

危険な橋を渡るのがスイーパーの仕事だ。とは言え…。

南本財閥が相手だ。

断ったら殺されるかなあ、俺。

自分がコンクリートで固められて海に沈められたり、ばらばらにされて豚の餌にされる様子を思い浮かべていると、雫は顔を俯かせたまま肩を震わせて両拳を握り締めていた。肘まですっぽりと覆った白いグローブにぼたり、と水滴が落ちるのを見て友哉は首を傾げた。

泣いている。

なぜ涙を流しているのかは察するに余りあるが、スイーパーを雇おうとするのだからそれなりの何かがあるはずだった。

「私は！私は南本友哉さんにやつてもらいたい事があるんです！」

「お、おいおい。泣くな？な？泣かないでくれよ」

友哉が中腰になって雫に近付こうとするとセバスチャンがすつと

間に入つて行く手を遮つた。

「お嬢様にこれ以上はお近付きになられないようお願いします」
善意の警告。

友哉はその六十近い細身のバトラーに近付かない様に腰をソファに降ろす。

「近付かない、わかつた。でも泣くのは勘弁してくれないかな？女の涙の魔力に抗えないんだ、俺は」

友哉がそう言うと言が顔を上げて友哉を真っ直ぐに見た。

「友哉さん。あなたはやはり…本当に夢幻導師なのですか？」

「そのつもりで来たんじゃないのか？」

友哉が尋ね返すと言は小さく頷いて、両手で顔を拭う様にして涙を拭き取つた。お行儀があまり良くないその行動にどこか親近感を感じて友哉は言が泣き止むのを待つ。

「えっと…友哉さん。お願いがありました」

「ほいほい」

友哉が軽く返事をすると言が面白くなさそうな顔をして友哉を睨み付ける。真剣な話をしようとしているのに友哉の態度はまるで、宿題を写させてくれと頼まれた友人の様な態度だった。

「真剣に聞いていただけませんか？」

「真剣ですよー？真剣ですとも。それとも何、俺が不真面目に見える？まっとうな社会人でしょーに」

友哉が両手を広げて見せると言はため息を吐いた。

「まっとうな社会生活を営んでいる人間が、三か月も家賃を滞納して、電気ガス水道全てのライフラインを止められ、雇用にも付いていないとは言えませんか？」

「…ちっ」

友哉が舌打ちすると言が苛々した様子で腕を組んだ。先ほどまで泣いていた少女とは思えない。

「いいですか？友哉さん。私はあなたに依頼をしに来たんです。私が依頼者であなたは受ける側の人間。私はお客です、なのに何です

かその態度は！お茶は出ない、座る場所もない、部屋は汚い、洋服は汚れている。その上臭い！」

なんでそこまで言われなきゃならんのだ…。

友哉はがくり、と肩を落すと雫は勝ち誇った様ににこりと微笑んだ。

「依頼の話に戻ります」

好きにしてくれ。

友哉はそう思うと雫はセバスチャンに目配せするとセバスチャンが何処からともなく大きめの書類の入る様な茶封筒をテーブルの上に置いた。

友哉はそれを見てから雫を見上げる。

「開けてください」

「…」

友哉は封筒に手を掛けようとしてその手を止める。

「出て来い」

友哉は封筒を右手でばんと手の平で叩くと緑色の淡い光を放つ小さな裸の少女が現れてきよんとして友哉を見上げる。

「封筒を開けていいかな？」

「…」

五センチほどの少女が首を傾げると友哉はため息を吐いた。封筒に施されている魔術で、無理に封筒を開けようとするこの小さな精霊に攻撃されてしまう。下等精霊とは言え、夢幻導師と呼ばれる人間でなければ見えない上に、攻撃を受けたら死ぬことも有り得る。それ以上に封筒の中身をぼろぼろにされてしまったては中身の情報を見る事も出来ない。

防犯、にしてはやり過ぎだな。

テストをされたことを察して友哉は億劫な気分になった。こういうやり方は余り好きではない。抜き打ちテストだ。

パチン、と左手の指を擦り合わせる様に弾いて鳴らすと少女がぐしゃり、と潰れて消失すると雫は片目を閉じてその様子を見ていた。

「何をしたんですか？」

「殺した」

友哉は淡々とそう言うつと封筒の中身を開いて見ると写真が二枚入っていた。真つ黒の写真が二枚入っているが、友哉はその写真をテーブルの上に置いてそれを裏返して白い面を上にした。

「人じゃないんだ。殺したつて言うのも可笑しいか？」

雫はゆつくりと顔を左右に振ると友哉は頷いた。

「封筒を開けるのが依頼だったら…嬉しいんだけどね」

「ええ、それも依頼の一つでしたが…。成功ですね」

そう言うつことか…。

多すぎる相談料を考えれば当然のことだった。だから文句も言わなかったが、結果としてはそれ以上に厄介なことを押しつけられると言つ事になる。

友哉が真つ黒の写真の上でトントンと指を鳴らす。

「ここから先は話を先に聞かせてくれないかな？」

「…まるきり馬鹿、と言うわけでもないようですね。目先の利益のみを追求するだけではない、臆病なまでの慎重さも兼ね揃えて居るわけですか」

どう聞いても褒められているような気がしないが、友哉はとりあえず黙つて置く。

「十四枚のカードを集めて欲しいんです」

真剣な顔をされて友哉は余計におかしくなった。

「おいおいおい、寝言は寝てから良いなよお嬢さん！くう、ははははははっ！」

耐えきれずに笑い出した友哉に雫が顔を真つ赤にした。

「此処に来る前に二人の夢幻導師にもそう言つたら大笑いされましたよ！封筒の解除も出来ないレベルの夢幻導師だったのでこちらから願ひ下げしましたがねっ！」

地団太を踏むような雫に友哉は笑いを堪えて何度も頷いた。

「当たり前だろ。このステートの領土を考えて見る。たった十四枚

のカードを集めるなんて簡単に出来るわけがないだろ！その上…その上？」

友哉が二枚の写真をひっくり返して見ると啞然とした。

「さすが、と褒めておきましょうか？南本友哉」

二本の銀色の剣がクロスしている紋様の左右にある太陽と月の模様が描かれている裏のカードと燃え盛る様な炎が惑星を包み込んでいる絵が描かれている表の絵を見て、友哉はごくり、と喉を鳴らした。

実在した。

レジェンディアカード、最上級ランク…ウイザードのカード。

「ポルトガリー…これは何処にあるんだ！」

友哉が雫に詰め寄ろうとすると、突然視界が防がれて顔を押し戻されてソファに座らされると、セバスチャンが目の前に立っていた。再び立ち上がろうとすると額に手を当てられて全く動けなかった。何かの武術の様だが友哉には全く理解出来なかった。

「嬢さん！教えてくれないか！そのカードは何処に！」

「私の屋敷にありますわ」

雫はそう言いながら壊れたドアを踏み付けて外に出て行こうとした。

「まあ…そうですね。ありもしない物を探す様なスイーパーはいませんよね。残念ですわ。封筒と写真に気付いた実力を飼って雇ってあげようかと思いましたが…」

明らかに上目線で物を言われて友哉が焦る。セバスチャンも雫の背後に付いて外に出て行こうとしているのを見て友哉は立ち上がって、両手首を合わせて手の平を雫の背に向けた。

「うおおおっ！」

久しぶりの魔術の解放に身体の神経に電流が流れる様な感覚が甦る。

ばしんつと大気の膨張する様な音が響いた。

「んっ、あう！」

官能的な悲鳴が響き、セバスチャンは目の前で両手足を伸ばして空中に浮かぶ雫の姿を見てから友哉に振り返ると、友哉は銃口をセバスチャンに向けていた。

ふっと友哉は気付いて銃口を降ろして右手でそれを後ろに隠して苦笑いするとセバスチャンは少々呆れた様にため息を吐く。

「えっと…」

友哉は左手で手招きをすると雫の身体が床から十センチほど浮いたまま、友哉の前に運ばれた。

「ごめんなさい」

友哉が頭を下げると雫がその場でじたばたと暴れるが拘束が解けるわけもない。手首、足首、首、胸、腰にオレンジ色の光の輪が身体を拘束しているのだ。

「えっと…それとその依頼受けたいんだけど？」

「…そう言うのは、拘束を解いてからお願ひします」

雫が上から睨みつける様にしてそう言うと、友哉は苦笑して解除しようとする、輪が狭まって雫の身体を余計に締め付けた。

「んうっ！ちよ、ちよっと！なんで締めるんですか！」

苦しみ、身悶える雫の顔を見て友哉は何処となく胸が高鳴る感じがして見上げると、涙を溜めて雫が友哉を睨み付けた。

「この！離しなさい！無礼者めっ！」

「…はい」

友哉がパンと両手を叩くと燐光が両手で弾けて拘束が解けた。

「で、契約は？」

友哉が恐る恐る尋ねると、がんと顎に衝撃を貰って友哉は目の前に星が散ったのを見た気がした。

雫の左拳が見事にヒットしていたことに気付いたのはしばらくした後に気付いた。

来訪者（後書き）

思ったよりも一部が短い設定っぽいので時間的に一時間くらいで一話かけるから、もっと早く更新できそうんだけど、原案さんが二人いるってことでなかなか話がまとまらないみたい。

だったらどっちにせーよと思ったり思わなかったり。基本的に前書きと後書きで愚痴れるからいいんだけどねー！

自由に書けるのはここだけなんだよー。

で、なんとなくエロい内容があるっぽいのでR十五なんだって！十八歳と十五歳の差がわからない自分としてはおっかなびっくりなので、出来るだけそういうのはなしの方向がいいんだけどねえ…。うっかりズキーンとかピーピー！とかホワーオみたいにテレビ的に伏せられちゃう単語使っちゃったりしてお叱りを受ける？のかどうか分からないけれど、そういうことはないようにしたいと思います。ではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0929q/>

夢幻導師

2011年1月11日00時11分発行